

若菜卷の世界と夕霧

—その状況と役割—

武原弘

若菜上巻の始発部は、唐突に、朱雀院鐘愛の女三宮の六条院降嫁のことを語り告げる。

出家を目前に、年稚い宮の将来を憂慮する院は、思案の末、源氏にその後見を依頼する。この決断に到達するまで、物語本文は、曲折する院の思量過程を精叙するが、そこに「抒情を極度におし殺した息の長い説得的な散文」の会話を連ね、第一部の物語では見られなかった、新しい文体と方法を開示する。宮の降嫁を契機として、以降に展開される紫の上の苦悩や発病、宮と柏木との密通事件、それぞれの人物の出家や死など、作者は、暗く深刻な悲劇の世界をその極限まで追求していくが、それは、ひっきり、「生ける佛の御国」(初音、二—37)と賞賛される六条院の内部崩壊を、鮮烈に描き写すものなのである。

このような第三部の悲劇世界の構造や方法については、すでに先学によるすぐれた論究が多く、その解明作業はほとんど尽くされているといえるのだが、つぶさに検討すれば、そこにはなおいくつか

の課題も残されていると考えられる。本稿では、とくに物語第一部との関連性を重視しながら、若菜巻では比較的実在感の稀薄な夕霧を視座の中心に置いて、その世界のトータルな再把握を試みたい。その場合でも、考察のキー・ポイントは、やはり女三宮の六条院降嫁とそれに起因する物語の状況の変化であり、そこに集中する作者の主題意識および方法がいかなるものかを問うところに求められるであろう。

まず、女三宮の六条院への降嫁が実現にいたるまでの過程で、源氏が宮の後見—それは事実上の結婚を意味するが—を承諾した理由が、重要な問題となろう。

しばしば指摘されるように、年令的に不自然としか言いようのないこの結婚が成立したのは、客観的状況を考量しての院の懇請によるものと解されるし、本文はそのことをこそ強調するための諸人物の会話を累積しているが、他方において、源氏自身の内部に発動する「すき」によるものでもあった。すなわち、宮は、源氏のいまはなき永遠の恋人藤壺の姫に当る。「この御子の御は、女御こそは、かの宮の御はからに物し給ひけぬ」(若菜上、三—30)と、宮の

素姓を知る源氏の心は強く動き、「かたちも、(中略)いとよしといはれ給ひし人なりしかば」(同、231)、「御心のうちにも、さすがにゆかしき御有様なれば、おぼし過ぐしがたくて」(同、235)宮との結婚を、内心よろこび取る源氏である。

思うに、藤壺に対する源氏の思慕は、この物語でもっとも重要な主題性を形成するものとして一貫している。源氏の生涯にわたって追求される「すき」の世界の真髄はこれであろう。第一部の物語世界の基根が、源氏の義母藤壺に対する思慕、あるいは藤壺の形代としての紫の上に対する愛の進展の過程に求められることは、あらためて説くまでもないたしかな事象である。

作者はここで、またも藤壺の形代物語を展開しようとするのであろうか。たしかに、六条院へ降嫁してきた女三宮を見つめる源氏の心底には、かつての少女若紫との邂逅の日々が甦っている。「かの、むらさきのゆかり尋ねとり給へりしをり、おぼし出づるに……(下略)」(同、237)と、同じ藤壺のゆかりとして迎えた両者の人柄は、あまりに相異したものであったが、世代を隔した二人の形代と同時にあいまみえて、源氏の「すき」はこれからいかに発展し、成熟していくのか―女三宮の六条院降嫁は、そのような主題追求のための新たな状況設定と読み進めることも可能である。

しかし、物語本文をさらに検するに、六条院における女三宮が、藤壺の第二の形代として存在する人物だとは、私には考えにくいのである。降嫁後の宮の姿に、源氏が故藤壺の面影をしのぶような場面は見出せないし、むしろ、あまりに幼稚で未熟な宮に、源氏は失望し、結婚を後悔してさえているのである。「などで、よろづの事あ

りとも、又、人をばならべて見るべきぞ。あだしく、心弱くなりきにける、我が怠りに、かゝる事も出でくるぞかし」(同、237)とは、一方において、宮の降嫁に強い衝撃を受けて深い苦悩に涙する紫の上に対する源氏の思いやりの情を表現しており、他方において、ひそかな「すき」心の発動に従って宮を得た自身の軽率さを反省する源氏の自戒の心内語とも読める。そのいずれであっても、宮に対する深い失望と、紫の上に対するいやましの愛情とを表裏の位相で精叙するこのあたりの物語描写において、藤壺の形代としての女三宮造型はありうべくもない。幼稚で未熟な女三宮造型が、藤壺に対する源氏の「すき」の限界、あるいは挫折を語ろうとする作者の意図によると仮定してみても、地方において、同じ藤壺を原基とする紫の上の理想性がますます深化発展するこの巻の世界において、源氏の「すき」はいぜんとして生きつづけていると考えられるのであって、女三宮造型にかかわる形代物語の方法の不熟の問題は水解しないままではある。

このように、作者はここで藤壺の形代物語を再び始めようとしているのではない。にもかかわらず、当初における源氏の宮に対する「すき」心の発動は、重要な意味をもつ。それは、しばしば説かれるような、源氏を中心とする紫の上と女三宮との三角関係という物語の新構図を導き出す要因としてのみならず、いまひとつ別の状況設定の基軸をも生みだすものだからである。私見によれば、源氏の「すき」を、第一部の世界の展開として、新たな状況の中で見きわめようとする人物夕霧のためにそれは用意されたもので、女三宮の六条院降嫁は、その重要な実験的虚構である。

女三宮の婿選びに際して、朱雀院が第一の候補にあげたのは夕霧であった。二十才前のりりしい青年夕霧を見て、院は「この、もてわづらはせ給ふひめ宮の御後見に、これをやなど、人知れず、おぼし寄り」(同、216)、「若けれど、いと、警策に、生先たのもしげなる人にこそあめるを」(同、219)と、期待を寄せ、周囲の女房たちも、「いと、ありがたくも見え給ふ、かたち・用意かな」「あなめでた」(同、217)と、口々に夕霧を賞讃した。当の夕霧自身も、宮の婿がねに望まれて「心ときめきもし」、「さすがに、ほかさまに定まり果て給はんも、いかにぞやおぼえて、耳としまりけり」(同、228)と、宮に心を動かしている。ただ、宮の乳母は、「中納言は、もとより、いと、まめ人にて、年ごろも、かのわたりに心をかけて、ほかさまに思ひ移ろふべくも侍らざりけるに」(同、219)と、期待をかげず、夕霧自身も、雲居雁をいまさら裏切るだけの勇氣をもたなかった。また、源氏の眼に映る夕霧は「年若く、かろくしきやうなれど、行先とほくて、人がらも、遂に、おほやけの御後見ともなりぬべき、生先なぬれば、さもおぼし寄らむに、などか。こよなからん。されど、いといたくまめだちて、おもふ人、定まりてあめれば」(同、220)、他の競争者盤兵部卿宮、藤大納言、柏木に此して、最有力の候補者ではあるが、源氏としては、躊躇せざるをえなかったのである。

夕霧が婿選びに外れた原因を要約すれば、年令が若すぎるという条件のほかに、彼が世に稀な「まめ人」であつて、妻雲居雁との多

若菜巻の世界と夕霧 — その状況と役割 —

年にわたる筒井筒の恋の成就の物語を通して、作者はすでにそのよ
うな夕霧像をたしかかなものとして造型してきている。雲居雁とのお
ちついた結婚生活の中に、ここで新たな外からの侵犯者を導き入れ
るには、彼の「まめ人」としての人物像に異変を生じる危険性が大
きすぎたのであろうか。

しかしながら、第一部の世界における夕霧像には、そのような
「まめ人」としての性格のほかに、いまひとつ「すき者」としての
イメージもたしかに刻みつけられていたことを看過することはでき
ない。藤袴巻前後に語られる玉簫への懸想、あるいは野分の翌朝の
垣間見以来激しく燃えたつ、義母紫の上に対する秘せられた情念の
世界は、夕霧にもけつして無縁ではない「すき」の相貌を印象づけ
ていたはずで、とくに後者について、かつて伊藤博が論ぜられたこ
とく、「義母という禁じられた対象を恋うる物狂おしい想念に領略
された「まめ人」の映像が不吉な影を落としてくる」ところから、
野分巻以後の夕霧の世界に、後の柏木^(注2)女三宮密通事件という悲劇
の「見取図」、その「萌芽」を読みとることもできたのである。

このような「すき者」としての夕霧にとっては、女三宮との結婚
も、可能性としてありえなくなかった。本文を辿ってみても、宮
との結婚を悔いる源氏の心中思惟として、「若けれど、中納言をば、
えおぼしかけずなりぬめりし」(同、220)反省が叙せられているし、
さらに後の、六条院での女樂を描く条にも、宮を身近に見る夕霧が
「宮をば、いまま少しの宿世およばましかば、わが物にても、見たて
まつりてまし、心の、いとぬるきぞ、くやしきや」(若菜下、三一
347)と、自らの優柔を悔いている。そのときにも、紫の上に対する

秘められた恋情は止むことなく、「いかでか、たゞ大方に、心寄せあるさまをも、見えたとまつらん」(同、348)とする内界の昂揚にも留意する必要はあるだろう。

このように見てきて、作者は、若菜上巻の当初から、女三宮をめぐる源氏と夕霧の関係を基本構図とする新たな展開を用意し、それと並行ないし交錯する形で、紫の上をめぐる二人の関係の緊張深化の物語をも進めようとしていたものと私は考える。それは、先行の玉鬘物語の展開部に位置するものとして構想されたものに相違ない。

玉鬘物語の世界とは、端的に、一人の女性をめぐる父と子の恋の鞘当ての物語というところに要約されよう。父と娘、姉と弟の血の関係を裏返しにした、変則的で低劣にも見えるこの奇妙な物語が、より高い次元の主題性を担いしているとすれば、それは源氏の「すき」世界の成就であり、しかもそれが一貫して「まめ人」夕霧の批判にさらされるという、作者の複眼的物語方法によっている。それがいま、じゅうぶんな深化を遂げなかったことは、「まめ」と「すき」の二極にまたがって造型される夕霧像の不統一性、不徹底性にも、明瞭にあらわれてきている。

源氏の「すき」の成熟およびその批判という主題を担うために、第一部における人物たちは年令的に若すぎたのであろうか。この物語の作者は、源氏を中心とする主要人物たちの年令に厳格であり、物語における時間の描写こそが、方法としてのリアリズムの確立であると私は考えるので、玉鬘物語において試みた主題および方法をより本格的なものとする意図からも、若菜巻における人物の年令、

時間の経過についての叙述は、いっそう精確なものとなったのであろう。

かくて、四十の賀を迎えた源氏のもとに、十四才の若い女三宮が降嫁する。二人の結婚の実体を近くに傍観する立場にあって、いつでもその仲を侵犯する当事者にもなることができる夕霧は「二十にも、まだわづかなるほど」(若菜上、三―216)の若さであった。「まめ人」と「すき者」、傍観者と行動者とを同時に演出する夕霧にあって、六条院という空間と女三宮降嫁という状況とは、いま切実な意義をもつのである。

三

女三宮の降嫁によって紫の上にもたらされた深刻な苦悩や悲歎は、物語本文がつぶさに語るところである。作者は、おそらく、紫の上の内界に刻まれる苦悩をその深みまで克明に描き写すことを通して、平安朝貴族女性がひとしなみに体験し、詠歎した一夫多妻制度のもとの女性の悲劇的生そのものの実相を語りたかったのであろうし、紫の上はそのような典型として豊かな形象を得ている。紫の上の悲劇についてはすでに諸論があり、私も小考を公にしているもので、ここでは詳説しない。ただ、留意すべきは、宮の降嫁後、源氏の紫の上に対する愛情は稀薄化するどころか、逆にますます増大深化している点である。「一夜のほど、あしたの間も、恋しく、おぼつかなく、いとどしき御心ざしのまさるを、など、かくおぼゆらん」と、ゆゝしきまでなん(匣、姉)という源氏の深い愛情は以後も変わらず、「思ひのほかに、この宮の、かく、わたり物し給へるこそ

は、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとゞ加ふる心ざしの程を、御身づからの上なれば、思し知らずやあらむ」(若菜下、三一三五)との源氏の訴えにもつながら。他方において、宮に対する源氏の愛情もけつして軽薄なものではない。宮の人柄のあまりの幼稚さ、未熟さに、当初、源氏の失望は否めなかったが、つねに深い配慮を用いて接し、月日の経過につれて次第に成長していく宮に、源氏の情愛は深まる。源氏の配慮によって、紫の上との対面があり、両者の円満な仲が確立されるにおよんで、源氏の「すき」は完成の域に達したと評すべく、六条院は、従来にもまさる栄華を世に誇るのである。

物語はさらに、明石一族の僥倖物語を包含しながら、源氏の四十の賀、朱雀院の五十の賀準備のことなど、その栄華の極北を描き出すべく静かに展開していくが、紫の上の内界には苦悩が深まり、その肉体による徵象としての発病に向けて進む。それは、外に向って輝く六条院の、内部に深く進行する悲劇の序曲と評されるものであるが、その旋律はいま、あまりに微弱なものではあった。

さて、このような六条院の外と内とを、そのはざまに立って凝視する人物が夕霧である。彼はいま、源氏の傍近くにおいて、紫の上と女三宮の二人の義母に手を伸ばすことが可能である。しばしば六条院を訪れては、「思ひ及ばぬにしもあらざりし」(同、301)宮が、「いと若く、おほどき給へる一筋にて、(中略)けぎやかに、もの深くは見えず」(同)幼いことを見知る。が、源氏が「いとよく、教え聞え給ふ」(同、302)ことも目のあたりに見るので、次第に成長する宮の様子が実感できる。一方、紫の上は、源氏の用意もあつ

て、夕霧の目に直接は触れないが、物越しに察知されるのは、「静やかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をも、やむごとなく、心にくく、もてなし給ふ」(同)理想の女性である。「見し面影も、わすれがたくのみなさん」(同)とは、例の野分の翌朝の垣間見以来の彼の心情で、いまも変らぬ「すき」心の発動である。が、現実には近寄りやすいのは宮の方なので、「わざとおほけなき心にもあらねど、見たてまつる折あうなやと、ゆかし」(同、303)と、夕霧の「すき」は揺れ動く。

いさゝか細部にわたる本文引用を施したのは、ここで私は、父の二人の妻、夕霧にとつての二人の義母に限りなく接近する彼の、不義の危機の切迫を読みとりたいからである。夕霧が「まめ人」から「すき者」に変身する危機的状況は、物語の進行に伴って、徐々にではあるが確実に深まりつつある。作者が若菜上巻の始発部から構想したところを、いまここで具体化しているのである。

しかし、物語は、むしろ意外な柏木の再登場場によって、夕霧に迫る危機を回避する。柏木の六条院訪問は、物語の前後で、いかにも唐突な感じを讀者に与えるが、かねてから女三宮を恋慕していたとの短い断わり書きがあつて、にわかに物語舞台の前面に現われきたものである。

春日うららかな三月の蹴鞠の夕べ、桜花雪と散る静けさの中で、激しく乱れて興じる若者たちの一人柏木は、偶然に、夕映えにうかびあがる女三宮の艶姿を見た。瞬間、青年の胸中に深く抑えられて鬱勃としていた恋の情念が、炎となって燃え上がった。抑制し、感亂し、激情に身を委せて宮の寝所に走り密通する柏木とその死の物語

は、恋に殉じる青春の軌跡として、いかにも鮮烈な形象を示す。

いささか前後するが、若菜上巻の終結部に近い条で、六条院を辞去する夕霧と柏木の会話が叙せられている。源氏の宮に対する処遇を不満に思う柏木は語る。「院には、猶、この対にのみ物せさせ給ふなめりな。かの御おぼえの、殊なるなめりかし。この宮、いかにおぼすならん。(中略)屈し給ひにたらんこそ、心苦しけれ」(同、311)。夕霧は答えて言う。「たいくしきこと。いかでか、さはあらん。こなたは、さま変りておほし立て給へる、睦びのけぢめばかりにこそあべかめれ。宮をば、かたぐにつけて、いとやむごとなく、思ひ問え給へるものを」(同)。六条院の内側を垣間見た二人の青年の源氏批評である。それぞれに不義の恋の対象を含む六条院批判は、相互に自己弁護の口調について、一方的である。柏木が「この宮」と言うのに対し、夕霧が紫の上を「こなた」と言つて、両者がそれぞれに近称の指示語を用いているのが、私には興味深い。ともあれ、二人の女性を同時に愛するという源氏の「すき」の実体を透視しようとする青年の眼が、ここにはある。桜花のごとく華麗な六条院は、蹴鞠に身を投げる青年の感乱の中で、その空虚な内実を垣間見られた。六条院のエア・ポケットとも評しうる女三宮に特別の意識を抱く二人の青年の批評は、いずれも誤謬を避けえないものではあるが、その空しいほどに明るく浮かび出る小さな影を見た二人の眼は輝いていたのであろう。

こうして、宮をめぐる源氏と夕霧と柏木の多角関係が物語の新たな構図を形づくるが、これもまた、ここではじめての状況設定とはいえ、玉鬘物語においてすでにその見取図は試みられたものであ

る。玉鬘物語を中心とする第一部後半と第二部の世界との関連性を重視する私の視座からは、女三宮の降嫁をめぐる夕霧や柏木の状況およびその役割は重要で、ひつきよう、二人は源氏の「すき」の観察者、審判者としての役割を担うべく、貴重な存在なのである。

ところで、はじめに設定された、夕霧と紫の上、女三宮との危険な関係を、その極限状況まで深く追求せず、柏木によってそれを試みる作者の意図および方法については、なお厳密な検討が必要であろう。いっさい、若菜巻における柏木の登場場面では、やや不自然な唐突感がつきまとっている。宮との密通に及ぶ場面のはじめににおいても、「まことや。衛門督は、中納言になりにきかし」(若菜下、三一366)というように、発語を伴った叙述を見る。その唐突さこそが、この密通の悲劇性を高める手法だと解せなくもないが、夕霧をめぐる危機的状況の進行のテンポに比して、柏木をめぐるそれは急である。状況の展開を夕霧から柏木に転換していく作者の理由は、いろいろに考えられるが、私見では、やはり第一部の物語とのつながりで、雲居雁との真剣な恋愛を成就した夕霧の人物造型に用いた主題と方法を、作者はここでも維持する必然を無視できなかったのであろう。そこでは、敵父としての源氏の方針によって、夕霧は社会的栄達の道を捨て、敵しい大学教育を受け、また浮薄な女性との交遊を禁じられた。雲居雁との幼な恋だけは実らせたかったが、父内大臣の防害にあい、多年にわたる忍苦の後、これを結実させたのであるが、その間に型取られる夕霧像とは、源氏の「すき」とは対極の、「まめ人」としての人格性を中核とするものであった。若菜巻でも、作者はそのような夕霧像を守りたかつたのであろう。も

ちろん、源氏物語では、物語の主題や状況の変化に即応するように、人物たちはしばしばその人間像を変貌させる。夕霧についても、その「まめ人」像は、必ずしも固定的、不変的ではない。「まめ」と「すき」の両極に揺れながら、時として後者を前面におし出す夕霧像も見られることは、前節でも触れた。が、基本的な彼の個性とは、やはり「まめ人」としての人格性に求められるのである。

さらにまた、第二部の世界における紫の上の理想性追求の営為の中で、夕霧との密通という不義を忌避したいということも、柏木と女三宮の密通をもくろむ作者の意図にはあつたのであろう。

いずれにしても、ここに夕霧と柏木との対抗劇を読みとることが出来る。つまりは、前者が勝利し、後者が敗北するであろうことは、第一部における源氏と頭中将との対抗の投射図として見て、ほとんど自明的であり、この意味においても、柏木の密通と死の悲劇は必然であつた。物語は、第二部においても、第一部の構造や方法を継承しながら発展しているので、両者は截然と分かれたるものではない。

ともあれ、しかし、六条院に近づいてきた二人の青年が、源氏にとつて、侮ることのできない批判者、侵犯者であつたことが知らされるまでに、物語の世界に流れる長い時間が必要だつたのである。

四

若菜下巻の初頭に近い条で、「はかなくて、年月も重なりて」(三二八)との叙述があつて、物語は四年間の空白をもつ。続いて、冷

若菜巻の世界と夕霧 — その状況と役割 —

泉帝の讓位、明石女御腹の新春宮立坊のことが語られ、源氏一門のいっそうの繁栄が約束される。

しばしば論議されてきたことであるが、この四年間の歳月の経過は、若菜巻の世界にいかなる意義をもっているのか。

以降の物語が、紫の上の厄年、朱雀院五十の賀、源氏の老いなどを語るのを見て、四年間の空白はそのための用意と解するのは、妥当である。とりわけ、「ことしは、三十七にぞなり給ふ」(同、357)と、年令を明記された紫の上が、直後に発病し、二条院に移される状況設定は、それに続く女三宮と柏木の密通事件の用意と考えられ、この巻のクライマックスに相当するこの悲劇的事件の状況整備の一環として、先の四年間の経過が叙せられたものであることは確実である。ただし、その速い歳月の流れが、女三宮の肉体的、人格的成熟にも作用するものであつたことを確認するかのようには、作者は、宮の年令についても、「廿二ばかりなり給へど」(同、340)と明記する。ここで、宮の成熟を強調することは、物語の叙述に合致しないとも考えられるが、女樂で琴を弾奏した宮の成長ぶりをよるこぶ源氏の様子から、宮の成熟美が暗示的にならわされている。源氏が宮を訪ね、その琴を傍におしやりて同衾したその夜、紫の上が発病したと描写されているのも、やはり暗示に富む。宮の成熟を過大に論ずることの問題性は残るとして、こうした人物の年令に関わる短い叙述を軽視してはなるまい。

ところで、四年間の空白に直接する明石女御腹一の宮の立坊で、女御が立后するのも時間の問題となつた。かつて、濡標巻で、宿曜師の予言があつた。「御子三人。帝、后、かならず、並びて生れ給

ふべし。なかの劣りは、太政大臣にて、位をきはむべし」(二一106)。あるいはさらに、若菜上巻に叙せられる明石入道の夢告げは、「身づから、須弥の山を、右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて、世を照らす」(三一286)とあった。こうした予言が、いまこそ明白な現実となったのである。源氏は、これまでの至福の宿運を導いた住吉の神に詣るため、紫の上同伴で、明石一族を率いて下向する。

ここで、先の宿曜師の予言のほぼ完全な実現を見るとは、当然、源氏の実子を三人とする物語の構想が完結したことを意味する。すなわち、紫の上についてはもちろん、女三宮にも源氏の子は生まれないことが確定したのである。もとより、主人公の運命の予言とその適中は、古代物語の常套法なのだから、明石の上が姫君を産んだ時点において、読者にとってそれは自明のことではあった。が、いまここで、その予言が動かぬ現実と化したことを知らされ、読者は満足すると同時に、女三宮にも源氏の子が生まれないもうひとつの現実を知らされたことになる。

思うに、六条院に降嫁した宮に、子が生まれまいという保証は、必ずしもないはずである。可能性として、それは留保されている。宮の降嫁とは、そのような新事態をもち込んでおり、物語の中に、予言とその適中という定型法を超越する、新たな契機を導入するものでもあった。源氏と宮との結婚がもたらす問題性とは、これであろう。若すぎるとはいえ、宮が懐妊、出産しないと限らず、この巻において、明石女御は、十三才で今上の一の宮を出産している(三一282)。

あくまでも仮定として予期されうる宮の懐妊、出産について、物語の作者はいさかも語ろうとしない。が、紫の上の不安や苦悩の底には、それについての恐れもつきまとったはずである。子をもたない妻の座がいかに不安定なものであるかを、彼女は体験的に熟知していたはずで、かつて明石の上との対抗において、姫君を養女として引きとることによって、源氏の妻としての優位を確保したこともある。若菜上巻で、きわだって幼稚で未熟な宮に対面した紫の上が、「心やすく、親めきたるさまに」(同、286) 応対するのは、一面において、思慮と愛情に富む彼女の理想的人格を示し、他面において、宮に対して母親の態度をとることによって、内心の不安や嫉妬を抑え、自らを優位に置こうとする、保身の術でもあったろう。このような母性発揮にかかわる紫の上像が、幼稚で未熟な宮の人物像との対比によって、より豊かな理想的形象となりえていることは、いうまでもない。

先の四年間の空白を含む長い歳月の流れは、女三宮に源氏の子が生まれるという可能態としての物語状況を抹殺するものである。紫の上がもつとも恐れたであろうその可能状況について、作者は描写を超越する表現を施したと、私は考えたいのである。宮との円満な関係の持続によって、六条院は栄華の絶頂をきわめるであり、六条院での盛大な女樂は、源氏の「すき」の完成であった。

しかし、不安と苦悩にみだされた紫の上の時間は、徐々に、彼女の精神と肉体を侵蝕する。「この世は、かばかりと、見果てへる心ちする齡にもなりにけり。さりぬべきさまに、おぼし許してよ」(同、328)とは、紫の上が源氏に出家の許可を請願するときの詞であ

る。紫の上の出家志願については、小論を発表したこともあるので、^(注3)ここでは詳述しないが、いかにも唐突とも読める彼女の出家志願が、ここでたしかなりアリティをもつのは、それが先の空白の四年間を含めて、多年に及ぶ宮との拮抗関係がひとつの転機にさしかかってきている状況に発しつつ、またそうした状況を生み出すからである。やがて、女の厄年三十七才(実際は三十九才)を迎え、紫の上は発病する。それは、長い年月、彼女の内界に刻み込まれた、源氏の「すき」への不信と苦悩の、肉体による証しであるに相違なく、六条院はいま、まさしく崩壊の途をたどりはじめている。

ここで、六条院への侵犯の歩を早める二人の青年について触れない。柏木については、前節で述べた。しかも、源氏の子を産まない宮は、まさに女盛りを迎えている。柏木との密通による懐妊、出産という女三宮物語の展開は、精巧な状況設定のもとに、確実に進められつつある。

一方、夕霧と紫の上の密通事件は、物語において、ついに現実とは化してゆかない。先の四年間の空白は、その「可能態の物語」^(注4)をも完全に消し去った。紫の上は、年令的肉体的条件において、子を産む能力を失いつつあるからである。当然、夕霧と紫の上の不義はありうべくもない。子をなさない義母との不義密通の物語は、夕霧に限らずとも、この物語で何らの主題性をも担いえない。物語は、主題において、また状況において、夕霧を紫の上の世界から遠く退かせてしまう。

柏木の情念と惑乱の世界は、「まめ人」夕霧に共感されるものでなく、しかし、潜在的に共有されるものであった。「まめ」と「す

若菜巻の世界と夕霧 — その状況と役割 —

き」の間を徘徊する夕霧と、そのような彼を瞬時に越えて逝いた柏木—六条院の虚妄をいち早く過ぎていったふたつの青春の肖像である。

五

六条院の内奥を見とおす位置から、自身もその当時者たりうる王権侵犯の役割を、柏木に奪われ、内部に進行する悲劇の一部始終を傍観する夕霧の眼とは、六条院の虚妄、源氏の「すき」の偽瞞を透視しようとする作者自身の眼でもあろう。それは、第一部の世界で、理想の絶対価値として追求された源氏の「すき」世界を、根源から相対化する作者の視点なのである。

六条院は、確実に、音もなく崩壊していく。^(注5)外面に秩序と栄華を誇る六条院の内部にある虚無を見た夕霧は、自身その虚無を生きた紫の上とともに、たしかに、源氏の「色好み、もらるるの解体」^(注6)者ではあった。

注1 今井源衛氏「女三宮の降嫁」(『源氏物語の研究』昭和37・7所収)

2 伊藤博氏「『野分』の後—源氏物語第二部への胎動—」(『日本文学』昭42・8)

3 拙稿「紫の上再論—その「世の中」認識をめぐって—」(梅光女学院大『日本文学』第十五号、昭54・11)

4 高橋享氏「可能態の物語の構造—六条院物語の反世界—」(『日本文学』昭48・10)参照。

5 秋山虔氏「源氏物語」(岩波新書)ほかの諸論で説かれて

いるこの見解に対し、河内山清彦氏「六条院は崩壊したか

―歴史社会学派的方法批判・序章―」(『日本文学』昭49・

12)は強く反論する。私は前者に賛同したい。

6 野村精一氏「若菜巻試論―人間関係の悲劇的構造について

―」(『源氏物語の創造』所収、昭44・9)

なお、本文引用は日本文学大系「源氏物語」(岩波書店刊)に

拠り、その巻数とページ数を記した。